

進行期乳がん患者に対する妊孕性温存への看護支援のあり方

下西祥子（シモニシショウコ）¹⁾ 小松原千暁（コマツバラチアキ）¹⁾ 藤岡聡子（フジオカサトコ）¹⁾ 福田愛作（フクダアイサク）¹⁾ 森本義晴（モリモトヨシハル）²⁾

1)医療法人三慧会 IVF 大阪クリニック（イリョウハウジンサンケイカイ アイブイエフオオサカクリニック） 2)医療法人三慧会 HORAC グランフロント大阪クリニック（イリョウハウジンサンケイカイ ホーラックグランフロントオオサカクリニック）

【緒言】がん治療後の生存率の向上に伴い、がん治療後の生殖機能の低下や廃絶のリスクに対するがん・生殖医療が重要視されている。がんと診断された患者は多発する課題の自己決定が一気に求められる。妊孕性温存治療を受けるか否かの決定についても短期間に選択を迫られる。今回、乳がん治療前の妊孕性温存過程で遠隔転移が判明した稀な症例を経験したので、困難症例に対する妊孕性温存支援の課題を報告する。

【症例】41歳女性、左乳がん（ER+・PgR+・HER2-）、未経妊、パートナー有。乳がんと診断され手術と術後化学療法前の妊孕性温存目的で当院へ紹介。患者は乳がんによる生命と妊孕性喪失の危機を合わせ持ち、妊孕性温存治療を希望した。卵子凍結か胚凍結かを悩む中、妊孕性温存治療スケジュール中に骨転移が判明し、乳がん予後への不安から妊孕性温存治療中止か迷った。患者は骨転移の告知の衝撃により混乱していたため、患者と共に振り返りをおこなった。患者自身の「何を一番優先したいか」「どのように人生を過ごしたいか」を丁寧に聞き取り、患者の気持ちを傾聴受容し、選択に必要な情報提供を行った。患者は妊孕性温存治療を継続し「選択肢を残せる」との思いから、胚凍結ではなく卵子凍結を希望した。採卵後に「採卵をしてよかった」と話された。

【考察】“限られた時間の中で懸命に考え選択するプロセス”を重視しながら如何に意思決定過程を支援すべきか妊孕性温存チームで議論した。患者の複雑な心情を理解し関わったが、患者にとっては悩み迷う時間も必要であったと考えている。困難な症例であっても、がん治療への悲壮な思いと挙児希望のはざまを把握し、話し合いの中で情報を共有し、患者の納得のいく意思決定ができるよう、看護支援をおこなうことが重要である。